

令和6年度 静岡県立大学短期大学部

学校推薦型選抜・社会人特別選抜 試験問題

次の問に答えなさい。

問1. 「ローコンテクストの文化圏」、「ハイコンテクストの文化圏」のコミュニケーションの特徴について下の文章をふまえて、それぞれ50字以内で説明しなさい。

問2. 今後、対人援助職となる皆さんは、異文化間だけでなく価値観や考えが異なる様々な人と協働する場面に遭遇するでしょう。その際、行き違いや対立を避けて協働する人々と信頼関係を築くためには、どのようなコミュニケーションや思考が必要か、またその能力を具体的にどのように高めていきたいかあなたの考えを700字以内で述べなさい。

〈記述上の留意点〉

- ① 解答は横書きとすること。
- ② 句読点および改行による空白も文字数に含めること。
- ③ 問1の解答は1行目から「ローコンテクストの文化圏」について、3行目から「ハイコンテクストの文化圏」について記述すること。問2の回答は5行目から記述すること。

トレドのマネジャーたちと日本の同僚たちに代表される対照的なコミュニケーションのスタイルは順にローコンテクスト、ハイコンテクストとよく表現される。

これらの言葉が意味するところを知るために例を挙げよう。あなたは同僚のサリーと話している。あなたとサリーはどちらもローコンテクストのコミュニケーションを好む文化圏の出身だ。この文化圏出身の人々は子供のころからコンテクスト（文脈・背景）の共通性が低い環境を想定することに慣れ親しんでいる——つまり、ほとんど共通点を持たず、話し手と聞き手のあいだの暗黙の了解が比較的少ない環境である。

こうした環境では、かなり多くの場合、あなたはサリーと話すときも、ハッキリと自分の意見を口にし、そのメッセージを理解するのに必要な背景知識や詳細をすべて伝えようとするだろう。ローコンテクストの文化圏においては、シンプルで、明快で、曖昧さがないことが効果的なコミュニケーションだとされており、多くのコミュニケーターがこの要件に従うが、たいていは十分に自覚的ではない。アメリカが世界で最もローコンテクストな国であり、それからカナダとオーストラリア、オランダとドイツ、そしてイギリスと続く。

文化的慣習はひとつの世代から次の世代へと間接的かつ潜在的に伝わるものではあるが、それぞれの文化圏で適切なコミュニケーションのあり方というものを何度も教えられた記憶がある人もいるのではないだろうか。かく言う私もアメリカで育つ子供としてそうした教えを受けた。小学三年生のときの先生メアリー・ジェーンは、背が高く、細身できつい巻き毛の女性で、月曜の朝会ではいつも「きちんと

口で伝えよう、伝えた通り行動しよう」という標語を言って私たちを指導した。十六歳のとき、ミネアポリス・サウス・ハイスクールで私は効果的なプレゼンテーションを学ぶ選択授業を受けた。そこでは力強いメッセージを聴衆にうまく届ける昔ながらのアメリカ的なルールを学んだ。「まずこれから伝える内容を伝え、それから内容を伝え、最後に、伝えた内容を伝えよう」これが一言で言えばローコンテクストなコミュニケーションの哲学だ。

家でもローコンテクストなコミュニケーションの教えを受けた。多くの兄妹と同じように、兄と私もしょっちゅう口喧嘩をしていた。私たちの口論を減らそうと、母はよくアクティブリスニング（積極的傾聴）の手法で私たちを指導した。話し手はできるだけ明快に曖昧さを取り除いて話す。聞き手はできるだけ明快に曖昧さを取り除いて理解したことを繰り返す。このテクニックは誤解が生じていることを察知し訂正する手助けをするために使われるもので、無益で不必要な言い争いの大きな原因を（無くせるとは言わないが）減らすことができる。

子供のころからこうした教えを受けた私には、曖昧でないことは純粋に良いコミュニケーションなのだという考えが染み付いている。しかし、タカキが言ったように、日本のようなハイコンテクスト文化における良いコミュニケーションのあり方はずいぶん違う。日本やインド、中国、その他多くの国では、子供のころからまったく違ったスタイルのコミュニケーションを学ぶ——共通点や暗黙の了解があることを無意識に前提としたコミュニケーションである。

たとえば、あなたとマリアムという名の同僚はどちらもイランのようなハイコンテクスト文化の出身だとする。マリアムがあなたの家へ夜遅い電車に乗ってはるばる遊びにやって来て、十時に家へ着いたとする。寝る前に何か食べたいかと聞いたら、マリアムは丁寧に「いいえ、結構です」と答えるが、あなたは彼女に同じ質問をもう二回するだろう。そして彼女が三度「いいえ、結構です」と答えた場合に限り、あなたは彼女の答えが本当に「結構です」であることを受け入れる。

このやり取りの奥には、礼儀正しいイラン人なら誰もが知っている前提がある。あなたもマリアムも、礼儀をわきまえた人間はどんなにお腹が空いていたとしても食べ物提供を最初は一度断るということを知っているのだ。だから、二度か三度食事はいるかと聞かなければ、マリアムは空腹に悩まされながら眠りにつき、あなたはあなたで特別に用意したチキンサラダを食べてもらえなくて残念に思うことになりかねない。

イランのようなハイコンテクスト文化では、ある種のメッセージはあまりハッキリと口にする必要はない——そればかりか、口にするのは不適切であることも多い。もし最初に尋ねたときにマリアムが「はい、何かお腹がいっぱいになるようなものをいただけますか、ものすごくお腹が空いているんです！」と答えたら、品がないと思われるばかりか極めて無礼だと受け取られる可能性もある。さいわい、子供のころから学んでいる社会通念があるため、うかつにこうした無遠慮な振る舞いをすることはない。あなたとマリアムは「いいえ、結構です」が「もう一度聞いてください、お腹がペコペコなんです」という意味であり得ることを互いに知っているのである。

（引用：エリン・メイヤー 田岡恵監訳 樋口武志訳 『異文化理解力 相手と自分の真意がわかる ビジネスパーソン必須の教養』53～56頁 2015年 英治出版株式会社 原文 縦書き 字体は原文のまま）
The Culture Map by Erin Meyer Copyright © 2014 by Erin Meyer.
Japanese digital reprint published by arrangement with PublicAffairs, an imprint of Perseus Books, LLC, a subsidiary of Hachette Book Group, New York, New York, USA through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo All rights reserved